

## 特集：地域から学ぶ／地域とともに学ぶ —東洋大学における現場主義の試み—

子 島 進\*

近年、多くの大学において、地域との連携が提唱されている。それとともに、大学生が地域活性化やまちづくりに参加する事例が増えている。松戸中央公園を「アートパーク」にする聖徳大学（大成・齊藤・神谷、2010）や、商店街を活性化する一橋大（菱沼・田中編、2012）など、その成果が書籍として刊行されることも珍しくなくなってきた。また、サービスラーニング（学生のボランティア活動と体験的学習を結びつけた教育法）も、国内外の高等教育で活用されている（桜井・津止編、2009）。東洋大学国際地域学部では「現場主義」を掲げて数々のプロジェクトを実施している。他学部や他大学の事例を学びつつ、自分たちの活動をふりかえり、新たな展望を開いていくことが重要であろう。

この特集では、東洋大生が地域から学び、地域とともに学んでいる3つの事例を取り上げている。執筆者は、これらの活動を学生と一緒にやってきた東洋大の教員である。

紙プロジェクト（文京区を起点として複数地域）：渡邊暁子（社会学部）

フェアトレード（群馬県館林市）：子島進（国際地域学部）

ストリートチルドレン支援（フィリピン、セブ市）：ロバート・ヒューズ（国際地域学部）

最初に紹介するのは、「紙の総合学習を通じた地域間連携—文京区を基点とする実践的臨地教育をめざして」（通称：紙プロジェクト）である。これは、社会学部の社会文化システム学科における教育研究プロジェクトである。同学科では、社会学・文化人類学・地域研究の学際的な研究分野をベースとし、フィールドワークに基づく「現場主義」の教育を主たる教育指針とする。2007年の開始以来、大学キャンパスが所在する文京区を紙に関する調査研究の基点としつつ、過去5年間、海外でのフィールドワーク研修もおこなっている（マレーシア、台湾、フィリピン）。学生が海外へと関心を広げ、日本の地域の問題が、どのようにグローバルなつながりをもっているかを自覚・認識し、そして、日本でのフィールドワークがいかに海外とのかかわりを持つかを理解する、「往還的学び」を目指すものとなっている。

2番目は、フェアトレードである。発展途上国の生産者を、買い物を通して支援する運動であり、国際協力に関心を持つ大学生に人気のある活動である。この論文では、国際地域学部の学生が、主として群馬県館林市で行ってきた活動について論じている。この活動は、当初ゼミ活動として始まり、そこから学生サークル「ハートバザール」が派生した。開始から7年が経過した現在、地域の

---

\* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

中学校や高校へとネットワークを広げている。筆者の子島は、2005年のゼミ活動以来、学生と一緒にこの活動に参加してきた。1) 社会的な場の設定、2) メディアによる情報発信、3) ネットワークの形成の3点から活動を振り返り、地域における活動成果と課題を確認する（子島・五十嵐・小早川編、2010も参照のこと）。

最後の2つの論文は、英語の語学研修から派生した学生サークル Salamat を取り上げている。国際地域学部では、2006年よりフィリピンのセブ市にあるサウスウエスタン大学と提携して、語学研修を実施している。観光地として有名なセブであるが、町のあちこちで参加学生はストリートチルドレンに出会うことになる。ストリートチルドレンを生み出す原因となっている貧困について学びながら、学生たちボランティア活動に参加してきた。この一連の過程を記述しているのが、第3論文である。さらに、第4論文では、Salamatの活動から得た知見をもとに、Voluntourism—ボランティアとツーリズムの合成語—についての議論を展開している。

#### 引用文献

- 大成哲雄・齊藤ゆか・神谷明宏（2010）『ひと×まちからの創造』、悠雲社。
- 桜井政成・津止正敏編（2009）『ボランティア教育の新地平—サービスラーニングの原理と実践』、ミネルヴァ書房。
- 子島進・五十嵐理奈・小早川裕子編（2010）『館林発フェアトレード—地域から発信する国際協力』上毛新聞社。
- 菱沼勇介・田中えり子編（2012）『学生まちづくりの奇跡—国立発！—一橋大生のコミュニティ・ビジネス』学文社。